

## 〔基調報告〕

### 台湾研究、この10年、これからの10年 関西地域における台湾研究

下村作次郎

はじめに

1. 台湾史研究会と天理台湾学会
2. この10年
3. これからの10年

(要約)

本稿は、本学会設立10周年記念シンポジウム「台湾研究、この10年、これからの10年」の基調報告の一環として、とくに「関西地域における台湾研究」について述べたものである。報告は、関西地域に居住する研究者の台湾研究について管見する範囲でできるだけ網羅的に取りあげるように心がけた。

はじめに

いま春山明哲理事長から日本台湾学会全体の「この10年」について基調報告がなされた。私は、「関西地域における台湾研究」について報告を求められたので、管見するところを述べてみたい。

日本台湾学会の創立大会が開催された1998年には、関西には台湾研究に関する研究会が二つあった。一つは台湾史研究会であり、もう一つは天理台湾研究会（現、天理台湾学会）である。なお、台湾文学研究会は、その主体がほぼ天理台湾研究会に吸収されて、事実上の解体状況にあった<sup>1</sup>。

本報告は、まず上記の二つの研究会について述べ、そのうえで筆者に与えられたテーマについて述べて基調報告に代えたい。なお、ここでいう「関西地域」とは、中部地区から沖縄地区までを含めた地理概念であること、と同時に本報告は、この地域から発信されてきた台湾研究について、筆者が知りえた範囲で報告するものであることをお断りする。

#### 1. 台湾史研究会と天理台湾学会

関西地域で組織立った研究会として台湾研究をはじめたのは、台湾史研究会をもって嚆矢とする。創設は1977年5月であり、すでに30年を迎えている。

1997年3月発行の『台湾史研究』第13号は、20周年特別記念号を組んでいるが、そこに『台湾史研究会会報』第1号（1983年9月1日）より抜粋された森田明氏の「『台湾史研究会』のこと」が掲載されている。それによれば、京都大学教授の天野元之助氏の紹介により、清代の水利組織の研究者で台湾の研究にも着手していた森田明氏に石田浩氏（当時京都大学院生）が紹介され、そして「1977年5月から、同じく京大院生の江口信清、窪田弘両氏を加え、『台湾私法』の輪読

を始め、「これが『台湾史研究会』の発足ということになる」と、台湾史研究会創設の経緯が述べられている。

ここで、この30年の台湾史研究会の歩みを簡単に整理してみよう。

1977年5月 台湾史研究会創設

1983年9月 『台湾史研究会会報』創刊（1号から4号）

1986年1月 『台湾史研究』に改称（5号から16号）

1997年3月 『台湾史研究』第13号「20周年特別記念号」

1999年3月 『現代台湾研究』に改称<sup>2</sup>（17号から現在）

2002年7月 『現代台湾研究』第23号「25周年記念特大号」

2006年11月 『現代台湾研究』第30・31合併号「石田浩教授追悼号」

台湾史研究会は、最初は「『台湾私法』の輪読」からはじまり、その後「岡田兼・富田芳郎・増田福太郎・戴炎輝（田井輝雄）などの台湾に関する古典的研究、仁井田陞・今堀誠二らの中国研究、川野重任・笹本武治などの台湾経済に関する書籍や論文」を輪読し、6年後の1983年9月に『台湾史研究会会報』を創刊している。会誌は、上記のごとく、5号から『台湾史研究』と改称され、続いて1999年3月発行の17号より『現代台湾研究』と改称されて現在にいたっている。2007年9月発行の第32号が最新号である。（現在第35号まで発行されている）

会員数の変遷についてみると、石田浩「二十歳を迎えた台湾史研究会」（前掲台湾史研究第13号掲載）によると、20周年の年に、研究会会場は大阪市立大学の森田研究室から関西大学へ移ったが、この時の会員数は約60名だったとある。その後、5年後の第23号「25周年記念特大号」の発行時には、200名と急激に会員数が増加している<sup>3</sup>。ただ、石田浩氏が亡くなって以降、その打撃は避けられず、その後やや減少傾向にあり、事務局によると、2008年3月現在の会員数は178名（一般128名、学生50名）だという。

「二十歳を迎えた台湾史研究会」では、創設以来20年の該会の研究活動が概括されているが、「5. 今後の研究会活動の課題と目標」の中で、次のような抱負が述べている。これをいまから読むと、これらの抱負は、この10年間にほとんどが実現されて、今日に継承されていることがわかる。いわく、

「以上が、この20年間の台湾史研究会の活動である。近年、台湾研究が市民権を獲得しただけでなく、我々の台湾史研究会も市民権を獲得したようである。この20年の蓄積をバネにして、今後さらに一層活発な研究活動を実践していきたいと考えている。

まず第一に、可能ならば、特定の研究テーマのもとで会員による共同研究を行い、共同成果を公刊したいと考えている。次に、さらに欲を言えば、台湾の研究者や研究組織との研究交流を拡大して、国際的共同研究を実施したいとも考えている。そのためには各種の研究助成金を獲得して、大学院生にも研究資金を提供することができればと、大きな夢を抱いている。恐らく、これらの一部は近い将来に実現すると思われる。第三に、当面の事業としては、『台湾史研究』の内容をさらに充実させ、年2回の刊行を実現したい。第四に、毎年夏休み前に特定のテーマによる研究合宿をも実施したい。その際、大学院生や若手研究者を中心に研究報告を行

い、さらに台湾からも1～2名の研究者を招待して、若手台湾研究者に交えて研究報告をお願いし、これを『台湾史研究』の特集にして刊行したいとも考えている。」(11頁)

ここで石田氏が語った抱負がどのように実現したか、以下に列記してみよう。

会誌は、1999年3月より『現代台湾研究』に改称し、年間2回の刊行を実現している。また、毎年の夏休みを利用した研究合宿も「現代台湾史研究会学術討論会」の形で実現されている。この研究合宿では、毎年のように台湾から研究者を招待し、その研究成果を特集号に組んでいる。昨年9月には、12日・13日の両日、台中の静宜大学で、第10回「現代台湾史研究会学術討論会」が開催され、石田浩氏の遺志は現、松田吉郎代表のもとで維持・継承されている。

次に、『現代台湾研究』に改称された第17号（1999年3月）から最新号までを通覧して、該誌にみる研究についてみてみよう。

台湾史研究会の主な会員には、次のような研究者が名を連ねている。（順不同）

森田明、石田浩、二宮一郎、中田睦子、松田吉郎、中嶋航一、呉宏明、やまだあつし、河原林直人、北波道子、今井孝司、前田直樹、圖左篤樹、菅原慶乃、滝田豪、鶴峰雪嶺

この他、石田浩氏の人脈から、関東の松金公正氏（台湾宗教社会史）や都通憲三郎氏（台湾の教育や社会の研究。現台湾在住）、さらに台湾からの留学生であった張修慎氏、王恵珍氏、曾煥祺氏（いずれも静宜大学）らがいる。

以下、筆者の理解する範囲で、これらの研究者の研究について少し触れてみよう。

創設者の森田明氏は、東洋史が専門で、台湾研究では1972年12月に発表された「台湾における水利組織の歴史的考察－『八堡圳』について－」（福岡大学『人文論叢』4巻3号）をはじめ清代台湾における水利組織を中心とする論考が数多く発表されている。森田氏の研究業績は、「森田明大阪市立大学名誉教授・九州産業大学国際文化学部教授略歴・著作目録」として『現代台湾研究』第19号（2000年3月）に掲載されている。

日本台湾学会の元理事長石田浩氏は、2006年1月8日に台湾で亡くなられた。石田氏の全仕事は、圖左篤樹氏によって『石田浩先生研究業績目録』（アジア政経学会・日本現代中国学会・日本台湾学会、2006年5月21日刊行）<sup>4</sup>としてまとめられたが、その業績は膨大な量残されている。

『石田浩先生研究業績目録』に収録された業績は、I. 単著（16冊）、II. 編著（3冊）、III. 委託研究／報告書（3冊）、IV. 翻訳・翻訳校閲・監訳（5冊）、V. 共著／分担執筆（24冊）、VI. 論文等（104本）、VII. 外国での出版物（27本）、VIII. 小論／資料紹介／研究動向（50編）、IX. 新聞／ニューズレター（27編）、X. シンポジウム報告書／ディスカッション・ペーパー（19本）、XI. 随想／よせがき／挨拶（21）、XII. 書評（17編）となっている。石田氏の研究業績についてはそちらをご覧ください。

中田睦子氏は、専門は社会学であるが、石田氏同様早い時期に台湾でのフィールドワークを行っている。中田氏は、台湾史研究会の早期の研究者の一人だが、2000年3月5日に亡くなられた。『現代台湾研究』第20号（2000年10月）は、中田睦子先生追悼特集号を組んでおり、「中田睦子先生略歴および研究業績」が掲載されている。これによると、中田氏の最初のフィールドワークは、1978年9月から10月にかけて、中央研究院の台湾民族研究所の訪問学人として行った、宜

蘭市員山尚徳村における冥婚調査である。中田氏の業績は、この研究業績目録によって一覧できるが、その研究者としての姿勢や人となりは、石田浩「台湾農村と中国農村での思い出－二人三脚による農村調査－」に詳しく書かれている。頁数にして18頁もあり、当時まさに二人三脚で台湾や中国の農村に調査活動に出かけ深い信頼を寄せ合っていた二人の研究者の姿が生き生きと描かれている。中田氏の研究者像が描かれていると同時に、石田氏自身の研究者としての人間的な姿が描かれてもいる。

二宮一郎氏（大阪府立桃谷高校）は、創設会員である。初期は、鄭成功研究を行っているが、『現代台湾研究』（第30・31合併号、2006年11月）の「石田浩教授追悼号」には、「第五回内国勸業博覧会『台湾館』をめぐる－明治36年台湾総督府の一大宣伝－」という興味深い研究を発表している。

松田吉郎氏（兵庫教育大学）も創設会員である。東洋史学を専門とする松田氏の論考は、該会の会誌や『兵庫教育大学研究紀要』に多数発表されている。筆者にとって特に関心があるのは、氏の台湾原住民族研究である。該誌に発表された論考などを中心にして、2004年12月『台湾原住民と日本語教育－日本統治時代台湾原住民教育史研究』（晃洋書房）を上梓している。該書に関する書評は、会員の呉宏明氏（京都精華大学）によって書かれている（『現代台湾研究』第28号、2005年7月）。該書は、台湾原住民教育史に関する関西地域発信の先駆的な研究の一つである。副題にあるように「日本統治時代台湾原住民教育史研究」として一冊にまとめたのは該書をもって嚆矢とする。今後の10年の台湾研究では、台湾原住民族研究はさらに大きな研究分野となると予想されるが、該書は今後とも必読文献の一書となろう。

やまだあつし氏（名古屋市立大学）は、日本植民地時代の台湾経済史を研究対象とし、これまで台湾関係では、勸業政策、農業、繊維産業、地方行政と土地調査事業、台湾総督府民政部殖産局技師、台湾縦貫鉄道、手押軌道、米種改良事業などについての論考がある。

北波道子氏（関西大学）は、台湾における公営事業民営化に関する研究の一環として、『後発工業国の経済発展と電力事業－台湾電力の発展と工業化－』（晃洋書房、2003年3月）を上梓している。該書に関する書評は、会員の松本充豊氏（長崎外国語大学）によって『現代台湾研究』第26号（2004年7月）に書かれている。

今井孝司氏（関西大学ほか非常勤講師）は、社会学の立場から台湾の社会福祉に関する政策や制度について研究を進めている。

前田直樹氏（広島大学）は、政治学の立場から主として戦後の台米関係についての論考を発表している。50年代のアメリカの台湾政策、第一次台湾海峡危機（1954年－55年）第二次台湾海峡危機（1958年の八二三戦役）をめぐる「米台関係」やアメリカの台湾観などについて研究を進めている。前田氏は後述するが、関西地域における台湾研究の広がりによつて今後の手腕の発揮が期待される。

さらに、台湾史研究会には、長老格の鶴峰雪嶺氏<sup>5</sup>ほか、若手研究者として圖左篤樹氏（京都大学博士課程）や菅原慶乃氏（関西大学）、滝田豪氏（京都産業大学）らがいる。

最後に台湾史研究会の特色として、松田吉郎氏の次のような論評を紹介しておきたい。「近年

の研究会において研究報告を聞かせてもらっていて感じるものがいくつかある」として、次のように研究会の研究傾向をまとめている。

「第一に一次資料を用いた実証的研究が多いこと、第二に台湾におけるフィールドワークの成果に基づいた研究が多いこと、第三に、日本統治時代、現代台湾の研究が大半であり、オランダ、鄭氏、清朝時代の研究が少ないこと、第四に、歴史研究、経済、政治研究が多く、社会学的研究が少ないこと、第五に、台湾、日本、中国から見た研究分析は多いが、アメリカ、オランダから見た研究が少ないことである。そして、第六は日本時代の台湾在住の日本人、台湾人会員が多くなり、日本時代の研究発表が行われた際には、これらの会員が自己の体験談も含め、当時の台湾の実態を語って下さることである。」（7頁）<sup>6</sup>

次に、天理台湾学会の研究活動についてみてみよう。

天理台湾学会の前身は、1991年6月に創設された天理台湾研究会である。会誌『天理台湾研究会年報』は、1992年1月に創刊された。

創刊号には、「彙報」が掲載されているが、そこには「発会にいたる経緯」として「台湾に関する学術研究の発展促進と、研究者相互の発表研鑽の場として『天理台湾研究会』結成の動きが、天理大学から台湾にある中国文化大学〔当初は学院〕に交換教授として赴任した者で構成している『天理華岡会』のメンバーを中心に起こる。1991年4月8日、天理大学杉之内研究棟2階会議室にて、発足のための準備会を、天理華岡会の世話人である、塚本照和、池田士郎、下村作次郎、前田均、佐藤浩司の5名で開き、第1回発起人会にて討議されるべき事項について話合った」と記されている。第1回大会は、1991年6月30日に天理大学で開催され、天理大学教員を中心とした10名によって研究報告がなされた。

この第1回大会の報告テーマは、該会の特色の一端がよくあらわれているので、テーマを写してみよう。（順不同。研究分野で整理した。）

言語学・日本語教育：前田均「同志社大学荒木文庫蔵『阿眉族蕃語辞典』の位置」、村上嘉英「最近の台湾における言語政策」

文学：下村作次郎「トパス・タナピマの文学」、塚本照和「楊達の『田園小景』について」、蜂矢宣朗<sup>7</sup>「坂田基明と加茂きみ子」

宗教学：佐藤浩司「台湾のシャーマニズム」、今里禎「台湾における仏教習俗について」、三濱善朗「天理教の台湾伝道について」

文化人類学：池田士郎「タバロン・アミの神話における宗教的職能者」

歴史学：中村孝志<sup>8</sup>「オランダ時代の探金事業再論」

該会は、台湾史研究会と異なり、文学、言語学、言語政策、日本語教育、宗教学、歴史、文化人類学、台湾映画などの人文科学方面の研究報告が主となっている。

以下、該会の創立以来の主な足跡についてみてみよう。

1991年6月 天理台湾研究会創設。第1回大会。

1992年1月 『天理台湾研究会年報』創刊（5号まで）

- 1995年7月 天理台湾学会と改称  
1997年6月 6号から『天理台湾学会年報』と改称(15号まで)  
2000年7月 第10回記念大会  
2005年9月 第15回大会台湾大会  
2006年7月 15号から『天理台湾学報』と改称

該学会は、第2回大会以来、個別の研究発表以外に特別研究報告を設けている。以下、この10年の研究動向をみるうえからもそのテーマを列記してみよう。

第2回大会：程大学「二・二八事件と国民党政府の宗教政策」、第3回大会：松澤員子「台湾原住民族の新しい伝統形式への試み」、第4回大会：蔡茂豊「戦後台湾における日本語教育五十年」、第5回大会：金関恕「澎湖群島考古学の現状の紹介」、第6回大会：蜂矢宣朗「真杉静枝と窪川稲子」、第7回大会：杜国清「台湾文学と華文文学」、第8回大会：塚本昭和「日本時代の台湾文学」、第9回大会：山田忠一「天理教の台湾伝道と梅華会」、(第10回は記念大会)、第11回大会：市川信愛「華僑の島・金門調査報告」、(第12回はなし)、第13回：張良澤「台湾文学研究の回顧と展望」、第14回：孫大川「ペンでうたう－台湾原住民文学誕生の背景と現況、そして展望－」、(第15回台湾大会。後述)、第16回：林鋒雄「台湾民間戯曲の変化と不変化」、第17回：中島利郎「日本統治期台湾文学日本人作家の系譜」

本年6月28日に開催される第18回大会では、村上嘉英氏による台湾語関係の特別研究報告「台湾語における日本語からの外来語」予定されている。

該学会は、2000年7月1日と2日の両日、天理大学において第10回記念大会を開催している。7月1日は、国分直一氏と曹永和氏による記念講演がそれぞれ「懐かしの台湾研究－台湾研究今昔記」と「海の歴史から見た台湾」のテーマで行われた。実はこの時、国分直一先生は、事故で体調をくずされていたので、金関恕氏による問答形式で行われた。この時の講演記録は、金関恕「国分直一先生にきく」として『天理台湾学会年報』(10号、2006年)に掲載された。2日は、午前中は個別発表、午後には特別シンポジウム「台湾・民族・宗教－エスニックとアイデンティティ」、次の6名のパネリストによって行われた。

黄智慧「台湾先住民族に対する宗教研究のながれ(1895-1945)－官・学両伝統の形式と軋轢－」、佐藤浩司「二つのシャーマニズム」、松澤員子「台湾原住民のエスニック・アイデンティティをめぐる最近の動向」、鄭正浩「台湾民間宗教の伝承と変容」、張良澤「台湾文化建設の任務」、河原功「台湾原住民の悲哀－日本文芸作品からの鳥瞰」。

第15回大会は、台湾で9日台湾大学図書館、10日中国文化大学において開催している。

9日は、河原功氏と呉密察氏の記念講演が、それぞれ「台湾文学研究のおもしろさ、むずかしさ、そして今日的意味」と「日本植民地時代在台湾史的意義」のテーマで行われた。10日は、日本語セッションと中国語セッションに分かれて、それぞれ2分科会ずつ計23名による個別報告が行われた。

なお、該学会は、第14回大会で企画として第1回企画シンポジウム「いまも生きている日本語、および日本語文学について考える」を行っている。

岡崎郁子「黄靈芝－日本語と心中した台湾作家」（コメンテータ、澤井律之）と簡月真「リンガフランカとして生きている台湾日本語の実態」（コメンテータ、中川仁）。

最後にもう一点、該学会の特色の一つとして、台湾からの留学生の応募が多いことをあげておきたい。台湾からの留学生には、近年多くの博士の学位を取得する者が増えているが、該学会はそうした留学生の学会報告の場の一つとして機能しているといえよう。

その他、天理台湾学会関係者でもある研究者として、台湾語の研究者の村上嘉英氏<sup>9</sup>、文化人類学・宗教学の池田士郎氏、日本語教育や原住民族諸語の研究者である前田均氏<sup>10</sup>、日本語教育の堤智子氏、深川治道氏、三嶋健男氏、片田康明氏（以上、天理大学）、民族音楽の研究者の小林公江氏（京都女子大学）、日本語教育と原住民文学の研究者である魚住悦子氏（国際交流基金）、台湾映画研究家の川瀬健一氏、台湾文学研究の井手勇氏（天理教海外部）や久下景子氏（天理大学など非常勤講師）などをあげておきたい。

また、該学会員ではないが、関西在住の研究者には、他に日本語教育と台湾原住民文学の翻訳に尽力する山本由紀子氏（同志社女子大学）や、張我軍、頼和らの白話文学研究に従事する豊田周子氏（大阪市立大学）がいる。

台湾研究は、エリアスタディとして学際的研究分野である。従って、近年はその他の近接学会、たとえば中国文芸研究会、日本現代中国学会、日本中国学会、アジア政経学会、東方学会、日本文化人類学会においても台湾研究は歓迎され、さまざまな報告がなされるようになった。この点も台湾研究にとっては、この10年の顕著な傾向だと言えよう。

## 2. この10年

以上は、関西に拠点を置いた二つの研究会・学会を中心にみた研究状況である。次に個別の個人の研究についてみてみよう。

冒頭で台湾文学研究会について言及したが、創設は1982年1月で、会誌『台湾文学研究会会報』をこの年6月に創刊した。該会は台湾史研究会創設の5年後に研究活動をはじめているが、会誌の創刊は1年早い。創立メンバーは、塚本照和（天理大学名誉教授）、張良澤（当時は筑波大学。現、真理大学）<sup>11</sup>、今里禎（当時天理大学）、中島利郎（岐阜聖徳学園大学）、美船清、下村作次郎（天理大学）であり、のち加わった主要メンバーには野間信幸（東洋大学）、澤井律之（京都光華女子大学）、黄英哲（愛知大学）らがいる。これらの台湾文学研究者の研究歴は、優に25年を越えるが、彼らはこの10年間も引き続き、それぞれ特色ある台湾文学研究を発信し続けている。

以下、彼らの研究活動について述べてみよう。

塚本照和氏は、関西地域においてはじめて台湾文学研究をはじめ、台湾文学研究会を創設した。このような台湾文学研究の先達である塚本氏の古稀を記念して出版されたのが『台湾文学研究の現在』（緑蔭書房、1999年）である。該書は、1982年に台湾文学研究会が創設され、その後

80年代、90年代と日台研究者間の学術交流が進み、その結果生まれた学術書である。該書は、1994年11月に清華大学で開催された台湾文学の最初の国際学会「頼和及其同時代的作家－日拠時期台湾文学国際学術会議」の研究成果をまとめた学術論集『よみがえる台湾文学』（東方書店、1995年）に次ぐ台湾文学論集である。

中島利郎氏の台湾文学に関する論考は、『日本統治期台湾文学研究序説』（緑蔭書房、2004年3月）におおよそ収録されている。該書出版後の論考には、2007年天理台湾学会第17回大会で行った特別研究報告「日本統治期台湾文学日本人作家の系譜」がある。中島氏は、この報告を「いずれ近い将来には、台湾文学のなかでは、日本人作家の研究は行われなくなるだろう」との危機感から行ったと述べている。この10年の動向をみると、一時期皇民化時期の文学研究の中で日本人作家の研究の重要性が指摘され、西川満や濱田隼雄、坂口禰子らの研究が盛んになったが、いまはそうでもない。特にこの方面に対する台湾人研究者の関心が薄くなった。そんなことから中島氏は、植民地時代の台湾で発表された日本人の文学作品の全貌を明らかにすべく、これまで発掘してきた作家・作品リストをもとにその系譜について詳細な報告を行った。筆者の観察では、この分野は未知の領域を残していると言える。つまり、植民地の台湾のメディアで受容されていた日本近代文学の全貌の解明がまだ手つかずのままである。今後の10年にこのような研究が行われれば、中島氏の研究は改めて脚光を浴びることになるだろう。

中島氏は、河原功氏と共に、緑蔭書房やゆまに書房から日本統治時代の台湾文学に関する文献を可能な限り網羅的に蒐集・整理して体系的に出版を行い、次に続く日台の研究者に大きな便宜をもたらしたといえよう。今後の10年における台湾文学研究では、中国の研究者も中島・河原両氏の研究は避けて通れないことになる<sup>12</sup>。

野間信幸氏は、現在は東洋大学教授だが、早い時期に張文環を中心に台湾文学研究をはじめている。張文環は東洋大学に在籍していたと言われるが、野間氏は東洋大学に保存されている戦前の記録や新聞を徹底的に調査している。

澤井律之氏の大きな研究成果は、中島利郎氏と協同して行った台湾文学史の翻訳である。葉石濤著『台湾文学史』（研文出版、2000年）と彭瑞金著『台湾新文学運動四〇年』（東方書店、2005年）がある。

黄英哲氏は、博士論文を一書にまとめ『台湾文化再構築1945～1947の光と影 魯迅思想受容の行方』（創土社、1999年）として上梓した。この10年の台湾研究の中で戦後初期研究は大きな研究分野となり、今後さらに研究が深まる傾向にある。本書は、そうした戦後初期研究に先鞭をつけた重要な研究である。

黄氏の日本の学会における活躍はよく知られている。張良澤氏が台湾文学研究の日本進出を目論んだのに対して、黄氏は台湾文学の国際学術交流と地位向上のために大きな役割を担った。日本を中心として台湾、中国、そして在米台湾文学研究者に輪を広げた研究は、台湾文学におけるこの10年の際立った研究の一つである。こうした台湾文学の国際化の視野に立って著された研究成果には、『台湾の「大東亜戦争」』（共著、東京大学出版会、2002年）と『記憶する台湾 帝国との相克』（共著、東京大学出版会、2005年）がある。

下村の研究は、『文学で読む台湾』（1994年）にその原型がみられるが、台湾文学史の大きな流れを台湾人作家を中心に考察している。下村はまた、呉錦發著『悲情の山地 台湾原住民小説選』（田畑書店、1992年）の翻訳以来、ここ10年、台湾原住民文学の翻訳・研究に従事し、新しい研究分野の開拓に努めている。

その他、関西地域には、岡崎郁子（吉備国際大学）、星名宏修（琉球大学）、秋吉収（九州大学）、三木直大（広島大学）、上田哲二（中央研究院で研究中）らがいる。

岡崎郁子氏には、台湾文学の専門書が二冊ある。『台湾文学－異端の系譜』（田畑書店、1996年）と『黄靈芝物語－ある日文台湾作家の軌跡』（研文出版、2004年）である。後者は、いま研究が広がりつつある黄靈芝研究である。岡崎氏は、黄靈芝という稀有な日本語作家の短編小説を国江春菁著『宋王之印』（慶友社、2002年）として編集・刊行し、その存在を広く紹介した。その功績は大変大きい。黄靈芝研究は、今後の10年、脱植民化研究の中でさらに多角的な研究が生まれるであろう。と同時に日本語作家への研究が再検討されなければならない。日本植民地時代に活躍した日本語作家は、戦後の中国語社会の中で自己の戦前の日本語作品を本当のところどのように考えていたのか、再考を迫られる時期がくるのではないだろうか。

星名氏は、台湾文学研究の草創期に周金波や陳火泉、王昶雄といった台湾作家を研究したことで知られるが、この10年は沖縄に拠点を置き、沖縄からは台湾文学はどのようなものとして捉え得るのか、そのような研究視覚に移行している。そのような研究として「交錯するまなざし－植民地台湾の沖縄人はいかに描かれたのか」（『野草』64号、1999年）や「『植民地は天国だった』のか－沖縄人の台湾体験」（『複数の沖縄』人文書院、2003年）があるが、星名氏の研究は、これからの10年の台湾文学研究にとっての新機軸を打ち出す可能性がある。

秋吉氏は、魯迅研究者であるが、「台湾の魯迅」と称されたことのある頼和の文学にみる魯迅の影響や頼和の「南国哀歌」を通じた霧社事件に関心を寄せている。台湾文学研究の中で、白話文学に関する研究は日台双方で下火だ。台湾では、台湾語ナショナリズムがこうした傾向に影響を与えているように思うが、このような傾向は学問的ではない。本格的な台湾語文学研究の確立のためにも、台湾白話文学の研究はもっと拡大・深化されねばならない。

この10年の台湾文学研究の中で、大きな成果を生み出したのは、藤井省三・山口守・黄英哲編の「新しい台湾の文学」シリーズなどの翻訳書の出版とも言えるが、台湾詩集の翻訳出版もその一つである。

台湾現代詩集の出版には、80年代から90年代初年にかけて北原政吉編『台湾現代詩集』（もぐら書房、1979年）や北影一訳編『台湾詩集』（土曜美術社、1986年）、陳千武・北原政吉編『台湾現代詩集』（もぐら書房、1989年）、秋吉久紀夫訳編『陳千武現代中国の詩人詩集』（土曜美術社、1993年）があるが、この10年は台湾の林水福氏（高雄第一科技大学）と協力して、先述した三木氏や上田氏、さらに北島、芒克らの詩の訳者として知られる是永駿氏（立命館アジア太平洋大学）や松浦恒雄氏（大阪市立大学）、そして関東地区在住の池上貞子（跡見学園女子大学）らが台湾現代詩の翻訳・出版に尽力している。その研究成果には、『台湾現代詩集』（国書刊行会、2002年）、『台湾現代詩人シリーズ』全3冊（国書刊行会、2002年－2004年）や『台湾現代詩人シ

リーズ』全6冊(思潮社、2006年-2007年)、楊牧・上田哲二訳『奇萊前書-ある台湾詩人の回想』(思潮社、2007年)などがある。これらの台湾詩人の中で、この10年で最も注目されてきたのは、日本語から中国語へと詩の言語を転換することに成功した詩人陳千武や林亨泰に関する三木直大の研究であろうか。

台湾文学関係では、山田敬三氏(元神戸大学教授)を忘れるわけにはいかない。80年代半ばから台湾文学研究に関心を寄せてきた。2004年には『境外の文化 環太平洋圏の華人文学』(汲古書院)という大部な論集を編み、台湾文学を華人文学の中でどのように位置づけるか、在米の杜国清氏(UCSB)や松永正義氏(一橋大学)、山口守氏(日本大学)らと協同研究を進めた。

以上は、台湾文学関係である。次に、その他の個別研究について鳥瞰してみる。関西地域在住の研究者の名前と所属を気がついた範囲であげてみると、次のような人々がいる。

中部地方では、浅野豊美(中京大学)<sup>13</sup>、森久男(愛知大学)や檜山幸夫ほか中京大学社会科学研究所台湾総督府文書目録編纂委員会のメンバー、関西地方では、伊原吉之助氏(帝塚山名誉教授)<sup>14</sup>、堀和生(京都大学)<sup>15</sup>、許淑真(撰南大学)、中川昌郎(京都外国語大学)<sup>16</sup>、近藤正己(近畿大学)<sup>17</sup>、駒込武(京都大学)<sup>18</sup>、中嶋航一(帝塚山大学)、金丸裕一(立命館大学)、中国地方では、吉田勝次(兵庫県立大学)<sup>19</sup>、鄭正浩(ノートルダム清心女子大学)、九州地方では、朝元照雄(九州産業大学)<sup>20</sup>、沖縄地方では、又吉盛清(沖縄大学)らである。

さらにこの10年に次のような若手が輩出し、著作や共著を出している。

河原林直人(名古屋学院大学)『近代アジアと台湾-台湾茶業の歴史的展開』(世界思想社、2003年)、森岡ゆかり(京都女子大学ほか非常勤講師)『近代漢詩のアジアとの邂逅』(勉誠出版、2008年)、松田京子(愛知教育大学)『帝国の視線-博覧会と異文化表象』(吉川弘文館、2003年)、松本充豊(長崎外国語大学)『中国国民党「党営事業」の研究』(アジア政経学会2002年)、渡邊ゆき子(沖縄大学)『週刊台湾網路 琉球発コラムで読む最新台湾事情』(ボーダーインク、2000年)、『台湾デスティニー 琉球発コラムで読む最新台湾事情〈2〉』(ボーダーインク、2007年)、宮崎聖子『植民地期台湾における青年団の研究(1910-1945年)』(2004年)などである。

ここで気がつくことだが、台湾研究には文化人類学者の研究が増えている。研究成果の多くは『台湾原住民研究』(1996年創刊-2007年第11号)に発表されているのと思うが、関西地域在住の文化人類学者には、松澤員子(神戸女学院大学)、山路勝彦(関西学院大学)、紙村徹(兵庫県立看護大学)、中生勝美(現、桜美林大学)、野林厚志(国立民族博物館)、上水流久彦(県立広島大学)、五十嵐真子(福岡女子大学)、宮岡真央子(福岡大学)らがいる。近年の出版から主な著作などを列記してみる。

山路勝彦『台湾の植民地統治〈無主の野蛮人〉という言説の展開』(日本図書センター、2004年)や『植民地主義と人類学』(関西学院大学出版会、2005年)、紙村徹編『神々の物語 神話・伝説・昔話集』(草風館、2006年)、中生勝美『植民地人類学の展望』(風響社、2000年)、野林厚志『イノシシ狩猟の民族考古学-台湾原住民の生業文化』(御茶の水書房、2008年)、上水流久彦

『台湾漢民族のネットワーク構築の原理－台湾の都市人類学的研究』（溪水社、2005年）や共訳『台湾外省人の現在』（風響社、2008年）、五十嵐真子『現代台湾宗教の諸相 台湾漢族に関する文化人類学的研究』（人文書院、2006年）や共著『戦後台湾における〈日本〉－植民地経験の連続・変貌・利用』（風響社、2006年）、宮岡真央子共訳・楊南郡著『幻の人類学者森丑之助 台湾原住民の研究に捧げた生涯』（風響社、2005年）などがある。

この他、台湾原住民族研究として『台湾原住民研究の現在』（草風館、2004年）をあげておきたい。編著者は、山本春樹（天理大学）、黄智慧（中央研究院）、浦忠成（パスヤ・ポイチョヌ、国立台湾史前文化博物館館長）、下村作次郎である。該書の特徴は、80年代の台湾原住民族権利促進運動を視野に入れ、90年代に入ってからの「台湾原住民族の人々を取り巻く新しい状況を、法律、教育、民族、歴史、文学、文化人類学、映画、ドキュメンタリー、音楽、文物、コスモロジーといった多元的な視野から」論じたものである。

編者の一人である下村は、呉錦発著『悲情の山地』の翻訳に関わって以来、台湾原住民文学に力を入れ、2002年以来、『台湾原住民文学選集』（草風館）の翻訳出版を続けている。

近年、原住民族研究に大きな業績を残している研究者としては、文化人類学者以外では、上述した『台湾原住民文学選集』の訳者の一人もある魚住悦子氏（国際交流基金関西国際センター）をあげねばならないだろう。魚住氏の原住民族研究は、鄧相揚氏の著作である霧社三部作の翻訳<sup>21</sup>にはじまっている。日本では霧社研究は戴国輝編『台湾霧社蜂起事件－研究と資料－』（社会思想社、1981年）以後、大きな進展をしていないように思うが、鄧相揚氏の三部作は該書にはない視野からの研究がなされている。

本章の最後に、筆者が知り合った台湾研究の留学生の名前をあげておきたい。関西地域では、次のような人たちがいる。（敬称略。カッコ内は留学先大学院）

呉豪人（京都大学）、黄智慧（大阪大学）、曾麗蓉（大阪教育大学）、林欣儀（大阪大学）、宋宜静（岐阜聖徳学園大学）、李郁蕙（広島大学）、簡月真（大阪大学）、張修慎（大阪大学）、莫素薇（関西大学）、王惠珍（関西大学）、阮文雅（広島大学）、李文茹（名古屋大学）、林春吟（京都大学）、陳瑞紅（奈良女子大学）、唐顯芸（神戸大学）、許時嘉（名古屋大学）、劉海燕（名古屋大学）、ヤユツ・ナパイ（京都大学）、林麗英（国立民族博物館）らがいる。

この10年は、これらの留学生の多くが台湾に帰り、さまざまな研究・教育機関に職を得て、台湾研究を続けている。

### 3. これからの10年

呉密察氏は、1996年11月25日付け『朝日新聞』に掲載された「消える『親日』の基盤」の中で、これからの日台の交流について次のように語っている。

「今後日本が直面しなければならないのは、日本語を話すことのできない、しかも、自信に満ちた新世代を中心とする台湾なのである。このような台湾は、正々堂々と対等に日本と付き合っていける台湾であり、さらには日本の競争相手としての台湾とも言える。戦後五十年を経

て、台湾はついに植民地の状態から脱却して、自分の道を歩き出した。このことは、台湾人をして対日観及び対日感情に微妙な変化を及ぼしている。」と語り、さらに、「以前の台日交流の状況は、多くの場合、日本語ができる台湾人と、中国語・台湾語ができない日本人の交流だったと言える。しかし、今後は、日本語のできない台湾人と、中国語、台湾語のできる日本人の交流の必要性が予想される。」と述べている。

呉氏が語るように、この10年の交流は、日本語世代との交流から中国語世代との交流へと前半は緩やかに、後半は急速に転換してきたと言えよう。

さて、過去10年の台湾研究を受け、将来の10年のそれはどのように発展・展開していくのだろうか。

台湾史研究会は、故石田浩氏の強力な個性のもとに豪腕で関西地域における台湾研究を牽引してきた。いまは、新しい代表である松田吉郎氏のもとに、2名の副代表、やまだあつし氏〔運営担当〕と北波道子氏〔編集担当〕が代表を支え、執行委員会を組織して、新しい体制をスタートさせている。(2008年4月5日)中心にいる研究者は、草創期の台湾研究を知る中堅研究者から、この10年のあいだに輩出してきた若手の研究者からなるが、今後どのように発展していくのか未知数である。

この9月7日に関西大学で開催される第12回現代台湾研究学術討論会では、シンポジウム「台湾原住民の現在を考える」が企画されている。このシンポでは、マサ・トフイ(タイヤル族民族議会議長)「タイヤル民族議会議と台湾原住民の自治」と題する基調報告が予定されている。

天理台湾学会は、2年後の2010年が第20回大会である。該会は、先にみたように第10回大会と第15回でシンポジウムや記念講演、台湾開催と新規な企画を試みているが、第20回大会では、今後の10年に影響を及ぼすような試みが期待される。

上記の二つの研究会・学会は、今後も関西地域における台湾研究の中核としてそれぞれ発展していくだろう。

では、その他の研究機関では、台湾研究をめぐる新しい展開はみられないのだろうか。近年台湾に限定したテーマでなければ、さまざまなワークショップやシンポジウムが開催され、その中で台湾についても取り上げられている。しかし、台湾研究を中心としたワークショップとなると、どのようなものがあるのだろうか。

筆者は、今年〔2008年〕3月16日、広島大学の前田直樹氏が開催された広大ワークショップ「広島大学 東アジアの平和構築と日本-日本との「脱植民地化」をめぐる今日的課題の解消に向けて-」(広島大学大学院社会科学研究所)に参加した。発表された報告は、「仏教交流と戦後の日華関係-『中外日報』における言説を中心として-」(坂井田夕起子)、「表象される記憶、表象されない記憶-日本移民村の文化遺産を例に-」(村島健司)、「台湾の日本語文学における『日本』-黄麗芝『董さん』さんを中心に-」(下岡友加)、「代行された『脱帝国化』・『脱植民地化』-渋谷事件を事例に」(楊子震)、「『脱植民地化』を巡る台湾と沖縄の相関性-戦後の在台沖縄人の問題を出発点として」(何義麟)である。

広島大学では、この年1月11日・12日に日台国際学術交流ワークショップ「国際人権保障体

制確立への国際法的歴史的アプローチ」（広島大学大学院社会科学研究所・政治大学台湾史研究所共催）を開催している。プログラムによれば、台湾関係では「台湾における自由化の歴史とその再評価：戒厳解除を中心に」（薛化元）、「台湾の人権現状－蘇建和冤罪事件を中心に」（呉豪人）、「台湾の人権と米国－台湾の政治的自由と米国政策との接点をめぐって」（前田直樹）、「人権と国家形成－1950年代台湾における戦争の想像と標語の表現自由－」（林果顕）、「台湾人の『戦犯』と『漢奸』」（和田英穂）、「台湾における人権と民族伝統文化の製造－1945～1975年における出版統制関連法規をめぐって－」（李衣雲）、の報告があり、台湾における人権問題が論じられている。今後、台湾研究の「領域際性」や歴史・民族における「重層性」がますます深められていくであろう。

この広島のワークショップに参加して感じたことは、今後の台湾研究は、台湾一地域に止まらない、東アジアや東南アジア全体の歴史研究の中で多角的に見ていく必要があることや、従来利用されてこなかった史資料や新出資料によっていっそう拡大・深化した研究が展開されるだろうということであった。

4月18日・19日には、天理市文化センターと天理大学を会場にして高一生生誕100周年記念国際シンポジウム「高一生（矢多一生）とその時代の台湾原住民族エリート」が開催された。内容はこの種の学会としてはユニークな二部構成となっており、18日は、「春の佐保姫 高一生記念音楽会」、翌19日は、午前中は個別研究報告、午後はパネルディスカッションと記念講演が行われた<sup>22</sup>。

18日の「春の佐保姫 高一生記念音楽会」は、高一生二男の高英傑さんをはじめ、ツォウ族トフヤ社頭目の汪念月さんを含む一行20名弱が来日し、高一生の代表作「春の佐保姫」や「つつじの山」など6曲とツォウ族の伝統音楽が披露された。

この音楽の上演の前には、高英傑氏による講演「父の思い出『下り列車』」（『高一生（矢多一生）研究』創刊号掲載、2005年7月）と周婉窈氏（台湾大学教授）による講演「高一生と父、そしてあの沈黙させられた時代」が行われた。高氏は、父高一生が逮捕された頃のことを語り、周氏は、その高一生の逮捕が周氏の父にどのような影響を与え、それがまた周氏や同時代の台湾人の記憶にどのような集団的な喪失をもたらしたかを明晰な言葉で内省的に語った。

19日は、8編の個別研究<sup>23</sup>とパネルディスカッション「高一生とその時代の台湾原住民族エリート及び現代的課題」が行われた。下村の司会のもとに8人のパネリストによって基調報告がなされ<sup>24</sup>、その後フロアーから意見が出された。意見が集中したのは民族自治区の領域をどのように定めるかの問題であった。ツォウ族の自治区問題では、トフヤの頭目汪氏の意見をまず聞き、それから新世代の楊智偉氏が意見を述べるというような場面があり、印象的であった。また、呉豪人氏は、原住民族エリートのジレンマの問題について触れ、アイデンティティの拠り所である「部落」とエリートの生活が乖離することによって起こる「危機・陥穽」の問題を指摘する一方、原住民社会の復興運動の成功例として、1、ツォウ族部落、2、スマングス部落、3、ウライをあげた。

記念講演は、国史館館長に就任以来8年間にわたって台湾史の発掘と檔案の整理を精力的に進

め、二・二八事件から白色テロ関係の檔案整理もほぼ終えた張炎憲館長による「白色テロと高一生」が行われて、台湾史研究が深いレベルにまで達したことが示された<sup>25</sup>。

該シンポジウムは、高一生の生誕百年を記念して開催されたが、ここで想起されるのは、1994年11月に清華大学で開催された「頼和及其同時代的作家－日拠時期台湾文学国際学術会議」である。台湾文学研究は、このシンポを境に飛躍的な発展を遂げた。陳萬益、呂興昌、林瑞明、黃英哲、藤井省三、中島利郎、河原功らがこれ以降大きな仕事をはじめたと言って過言ではない。この時、『よみがえる台湾文学－日本統治期の作家と作品』（東方書店、1995年）が出版された。高一生の生誕百周年記念国際シンポジウムが、今後の原住民族エリートの研究のターニングポイントとなって、多様な原住民族研究が飛躍的に発展することが期待される。

筆者が直接参加したのはこれだけである<sup>26</sup>。以下、これまで見てきたことを振り返ってこれからの10年の台湾研究についてどのような研究が重視され、多くの研究者の関心が寄せられるのか、筆者が考えるところを列記してみると、次のようなことが考えられる。

#### (1) 原住民族研究

この分野は、今後さまざまな学問領域や研究方法によりいっそう活発になることが予想される。例えば、文学（海洋文学、山岳文学、エスニック文学、都市原住民文学、原住民女性文学など）、民族自治区、原住民族文化運動、人権、開発、近代化、脱植民化、教育、原住民族政策、世界先住民族研究、環境問題、エコロジー、危機言語、現代音楽と民族音楽、スポーツ、民芸など

#### (2) 戦後初期台湾研究。台湾・中国・日本を中心とし、さらに韓国などの問題を含めた東アジア全体を視野に入れた戦後初期研究

#### (3) 国史館の檔案を使った二・二八事件研究、白色テロ研究

#### (4) 植民地文学比較研究

台湾文学の東アジアにおける位置、東アジアにおける台湾文学の越境、日本近代文学を介在した台湾文学、中国文学、朝鮮文学、旧満洲文学の交差・交流、異郷の日本文学研究、台湾発行の新聞に掲載された日本文学研究、眷村文学、日本語文学研究

#### (5) 本格的な台湾語文学研究

日本語文学や中国語文学、客家文学そして少数ながら存在する各原住民族語による文学とどう切り結ぶのか、問題を明確にしていく必要がある

#### (6) 外国籍労働者の問題

#### (7) 台湾と沖縄、台湾と南方・東南アジア、台湾と中国、台湾と日本

また研究者層の新しい傾向として、台湾では原住民族の研究者が大幅に増加するだろう。「自分たちの研究は自分たちで」というのが、原住民族権利促進運動以来の理念だったが、その理念がこの10年で意識改革と基礎作りが進み、若い世代が排出している。

以上、筆者が感知してきたところの関西地域における台湾研究を網羅的に概括してみた。テーマが大きく、私の個人の力量不足では充分網羅できないことをお詫びしたい。

## 注

- 1 台湾文学研究会については、「日本『台湾文学研究会』記念專輯』『台湾文学評論』（第3巻第4期、2003年10月）と中島利郎『日本統治期台湾文学研究序説』（緑蔭書房、2004年3月）の「『あとがき』にかえて」を参照されたい。該会は、日本ではじめて「台湾文学」を研究テーマに研究会活動を行った研究会である。会誌『台湾文学研究会会報』は、創刊号を1982年6月に出してから第20号（1993年11月）まで出した。小さな研究会であったが、台湾文学の確立を目指す台湾文学関係者や台湾史研究者からは大きな評価と期待を寄せられた研究会であったと言えよう。該会については、本文で後述する。
- 2 「…台湾史研究会という名称から研究対象を歴史だけに限定しているかのように誤解され、他分野の研究者を遠ざけるようになっていたからである。そこで、機関誌を『現代台湾研究』とすることで、台湾史研究会の守備範囲が政治・経済・社会・文化・文学と台湾に関するあらゆるジャンルを扱うということを公にした。」（石田浩「回顧と飛翔－台湾史研究会創設25周年を迎えて－」第23号、2002年7月）、3頁。
- 3 このころ急激に会員数が増えた理由として、台湾史研究会事務局の圖左篤樹氏に尋ねたところ、「日本台湾学会設立前後から会員数はうなぎ上りに増えてい」ったとのコメントを頂いた。
- 4 『現代台湾研究』《石田浩教授追悼号》（第30・31合併号2006年11月30日）に収録。
- 5 『台湾史研究』第15号（1998年3月）は、「鶴嶋雪嶺教授古希記念論文集」となっており、「鶴嶋雪嶺教授略歴」が掲載されている。
- 6 松田吉郎「台湾史研究会創設25周年を迎えて」（『現代台湾研究』第23、2002年7月）
- 7 台湾研究の先達である蜂矢宣朗氏の台湾関係論文は、その多くは私家版『湧生の記』（1980年1月12日）、『続湧生の記』（1990年1月12日）に収録されている。
- 8 中村孝志氏は、1994年4月6日逝去された。『天理台湾研究会年報』（第3号、1994年6月）には、中村孝志先生への追悼記事2編と目録が掲載されている。塚本照和「中村孝志先生を偲び、悼む」、許賢瑤「6年の追憶－中村先生を悼む」、許賢瑤「中村先生台湾史関係中国語訳文目録」。中村孝志編『南方関与と台湾』（天理教道友社、1988年2月）の刊行がある。その他、「（中村孝志）経歴と研究業績」『南方文化』21号（天理南方文化研究会、1994年11月）がある。
- 9 2007年に『東方台湾語辞典』（東方書店）を出版した。
- 10 前田均編『日本語教科書目録集成』（2005年。平成14～16年度科学研究費補助金研究成果報告書）がある。
- 11 現在、真理大学教授。『台湾文学評論』（2001年7月創刊）を中心に積極的に台湾文学研究を進めている。昨年、張良澤編『吳新榮日記全集』1、2（国立台湾文学館、2007年）を出版した。
- 12 中国社会科学院の黎湘萍氏は、天理大学で「時間的重軛－略談台湾文学之性格及其历史成因」（『中国文化研究』第24号、2008年3月）と題して講演を行い、その中で、「台湾文学の“史”の記述に関して、少なくとも二つの明らかに“忘れられた”点がある」として、「その一つは、日本統治時代の日本語で書かれた文学作品に対する全面的な認識が欠如している」こと、つまり日本語の原文に拠らないで中国語訳で読んで論を立てていることの問題性と、「第二点として、（略）台湾文学史における“浪漫時代”の記述が“失われた”という問題である」と述べている。黎氏のこの前者の日本語作品に対する見解は新鮮である。
- 13 共著に『植民地帝国日本の法的構造』（信山社、2004年）、『外地法制誌（第6部）復刻版』（竜溪書舎、同年）、『故郷へ－帝国の解体・米軍が見た日本人と朝鮮人の引揚げ』（現代史料出版、2005年）、著書に『南洋群島と帝国・国際秩序』（慈学社出版、2007年）がある。
- 14 1991年来出版されている『台湾の政治改革年表・覚書（柏村時代）』（帝塚山大学、1991年）の事項・人名索引が2007年3月に『台湾の政治改革年表・覚書.1994-2004年 事項・人名索引』として交流協会から出版された。該年表は、台湾研究者の間で高い評価を得ている。
- 15 近著に堀和生・中村哲『日本資本主義と朝鮮・台湾－帝国主義下の経済変動』（京都大学学術出版会、2004年3月）がある。
- 16 この10年の著作に、『中国と台湾・統一交渉か、実務交流か』（中央公論社、1998年）や『東亜』での連載エッセイ「台湾の動向」がある。
- 17 代表著作に『総力戦と台湾 日本植民地崩壊の研究』（刀水書房、1996年）がある。
- 18 『植民地帝国日本の文化統合』（岩波書店、1996年）、『日本の植民地支配－肯定・賛美論を検証する』（岩波ブックレット、2001年）など。
- 19 この10年の主な著書に『台湾市民社会の挑戦』（編著、大阪経済法科大学出版会、1996年）、『アジアの民

- 民主主義と人間開発』(日本評論社、2003年)、『アジアの開発独裁と民主主義』(同、2000年)、『アジアの経済と社会』(明石書店、1998年)がある。
- 20 著書に『現代台湾経済分析－開発経済学からのアプローチ』(勁草書房、1996年)、『開発経済学と台湾の経験 アジア経済の発展メカニズム』(同、2004年)、共著に『台湾経済論 経済発展と構造転換』(同、1999年)、『台湾の経済開発政策 経済発展と政府の役割』(同、2001年)、『台湾の産業政策』(同、2003年)、『台湾農業経済論』(税務経理協会、2006年)、『台湾経済入門』(勁草書房、2007年)などがある。
- 21 『抗日霧社事件の歴史－日本人の大量殺害はなぜ、おこったか』(2000年)、『植民地台湾の原住民と日本人警官の家族たち』(2000年)、『抗日霧社事件をめぐる人々』(2001年)。いずれも日本機関紙出版センター出版。
- 22 当日参加された川田順三氏は、該シンポジウムについての感想を『現代思想』(2008年7月号)に「原住民または先住民をめぐる」として発表されている。
- 23 陳昱升(台北市立教育大学院生)「論鄒族先覚者高一生之族群文化適応問題」/許雅筑(清華大学院生)「同化於文明与近代国家－高砂族青年矢多一生赴日観光及其影響」/鄧慧恩(成功大学院生)「高一生与学校社区化教育的接触：以『ハーバー先生』作為視角」/劉麟玉(人間文化研究機構)「ウオグ・ヤタウユガナ(矢田一生、高一生)の音楽の初歩的考察－植民地台湾の音楽教育とツォウ族音楽の観点から」/黄雅芳(中正大学院生)「日治時期台湾原住民教育養成和語文書写－以鄒族高一生為例」/中西美貴(京都大学院生)「エリートにはなれなかった『蕃婦』たち」/吳国聖・陳怡欣(政治大学院生)「原音重现－浅井惠倫資料中の花岡一郎語料之研究」/范燕秋(台湾師範大学副教授)「日治後期台湾原住民族的近代変遷与族群菁英的政治活動－以泰雅族樂信・瓦旦和鄒族吾雍・亞達烏猶卡那為中心」
- 24 浦忠成(国立台湾史前文化博物館長)「高一生重要行事及其影響」(代読)/吳淑人(中央研究院)「議会議政治家 樂信・瓦旦」/鄧相揚(台湾史研究家)「Gaya 與義理——花岡一郎與花岡二郎の族群認同」/孫大川(政治大学)「身教大師 Baliwakes－他的人格、音楽和他的時代」/馬場美英(高一生研究家)「高一生(矢多一生)の音楽からよみとれるもの」/塚本善也「高一生研究の可能性を探る」/楊智偉(山美社区發展協會理事)「国中之国－新夥伴關係與台湾原住民族自治」/吳豪人(台北駐日經濟文化代表処顧問)「原住民『エリート』のジレンマを乗り越えて」
- 25 原稿は、中国語と日本語の両方出された。日本語原稿は、4百字原稿70枚にもなる長大な論文である。
- 26 春山理事長より、日本台湾学会の関西部会研究大会についても触れるように求められていたが、当日はそれを忘れた。以下にその欠を補っておきたい。

関西部会研究大会は、第1回大会が2003年12月6日に開催され、この時は52名が参加し、「文化・文学」、「歴史・社会」、「政治・経済」の3分科会に分かれて、各2名ずつの報告があった。昨年まで全5回開催された。時期は、11月か12月である。出席者は、30名から40名である。

報告テーマの傾向は、「文化・文学」は、原住民文化(ルカイ族)、戦後初期台湾文学(龍瑛宗、国語教育)、日本統治期台湾文学(呂赫若、漢詩人久保天隨、国語、楊雲萍、作品論「彼女は何処へ?」)、戦後の台湾国語に関するものである。「歴史・社会」は、日本統治時代(信用組合、蚕業、漁業、「理蕃」官僚、教育、地方制度)、災害と情報(台湾921大地震)、台中結婚、宗教慈善団体、学校教育に関するものである。そして、「政治・経済」は、第2回大会で第6期立法委員選挙に関するミニシンポの企画ものを行ったほか、戦後の産業、政治(台湾民主主義)、民進党政権の外交、為替政策、中台関係、社債市場、アメリカ経済援助に関する報告が行われている。前2者の分科会の報告は、戦前に関する報告が多いのに比べて、この分科会は、いずれも戦後に関する報告となっている。

これまで、関西大学、名古屋市立大学、京都光華女子大学、近畿大学が会場となっている。

**【付記】** 本稿作成に当たっては、本学会のHP『戦後日本における台湾関連文献目録』や台湾史研究会、天理台湾学会の会誌を利用させていただいた。記してお礼申しあげたい。

(2008年4月29日/10月15日修正)